



1、富士山のように高く 教養を深め 視野のひろい市民となります

あした 古典文学に親しむ朝の会



井上靖さんを囲んで、朝の会の皆さん

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり…」有名な平家物語の一説です。

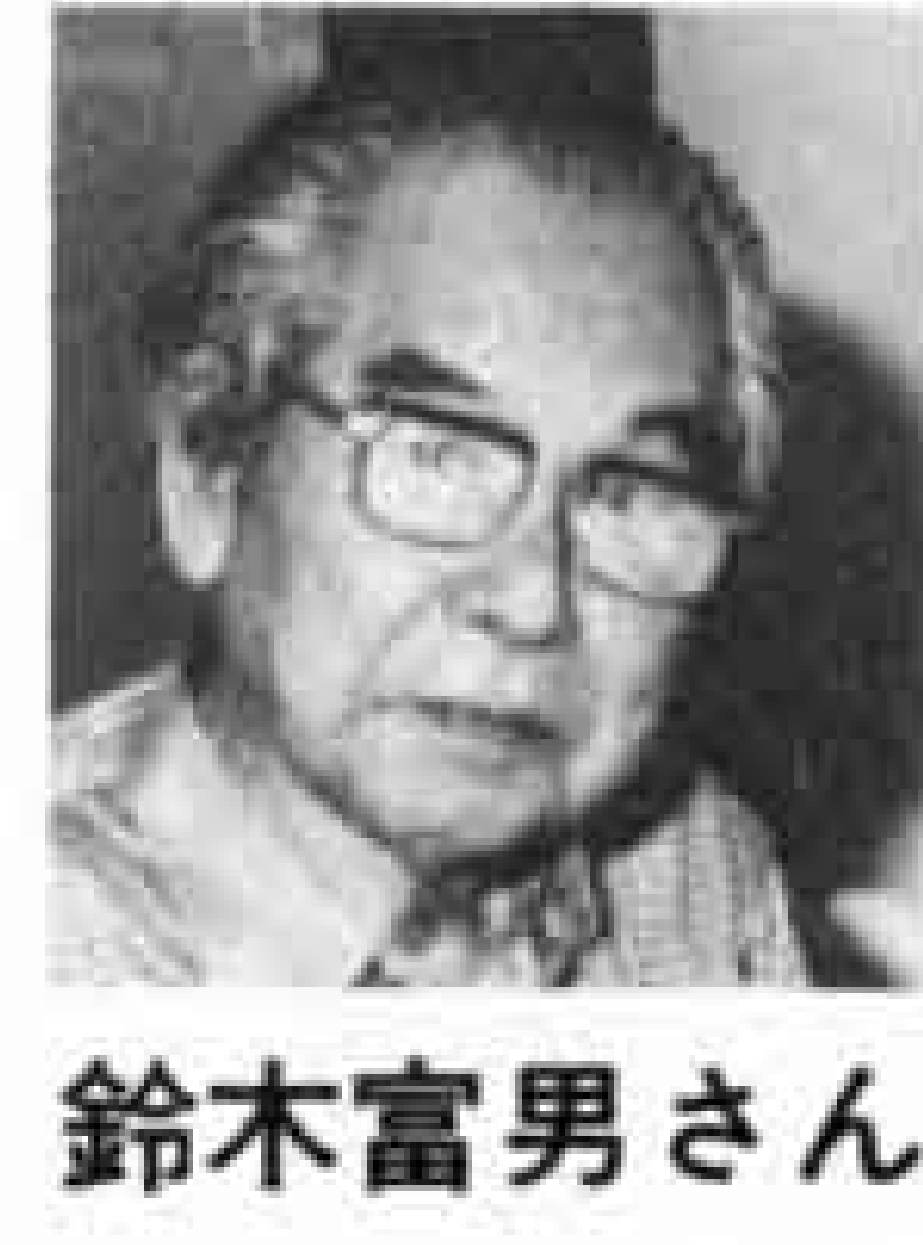
富士公民館は昨年度から本格的な古典文学講座を開講しています。今年度は平家物語を行ったところ、100人を超える人が集まりました。このしかけ人が「朝の会」（会長：加藤あさ美さん）の皆さん7人。古典文学好きの主婦の集まりです。

「これまでの文学講座は、2時間で代表的な作品のさわりだけちょっとやって終わってしまう。一つの作品を体系的に奥深く学びたい」と考えたのが事の発端。毎年5ヵ月をかけて、10時間みっちり学習します。来年度は、国学院大助教授青木修平さんの講師で古事記に挑戦するそうです。お楽しみに。

取材に欠かせないのがカメラ。カメラはどんどん進化し、いつのまにか編集室のカメラもオートフォーカスが主流に。ピント合わせは楽だし、露出も正確。カメラが偉すぎて、逆にその機能を使いこなすのに戸惑うこともあるくらいです。でも、このカメラ、完璧すぎて冷たさを感じてしまうのです。完璧になれない人間のひがみ？かな。

こちら編集室

ふるさとの昔話



鈴木富男さん

中里の妙見さん
三月十四日は、中里四丁目にある本妙寺の妙見さんの大祭です。今回は妙見さんのお話を郷土史家の鈴木富男先生（中里町三・八十歳）に伺いました。

中里の

妙見さん

みょうけん

星の王様北極星

磁石も地図もない昔々のことで。人々は夜空に輝く北極星を見て東西南北を知り、旅をしました。そして、満天にきらめく無数の星が、北極星を中心に回っていることから、人々は北極星をたくさんの星の王様と考え、信仰をするようになりました。

また、北極星のそばには、ひしやくの形をした北斗七星があります。人々は北斗七星の向きで季節を知り、農業の目安としていました。ですから、北極星と北斗七星は、生活に強く結びついていたのです。

お釈迦様が菩薩の位を

そのうち、「こうしていろいろな事を示してくれる北斗七星は、北極星が姿を変えて私たちに教えてくれているに違いない」と考えられるようになりました。

そこでお釈迦様は、人のために役

今でも続く妙見講

立ち、多くの人を救ってくれる北極星に菩薩の位を与えました。

本妙寺の妙見さんは、明治時代に大阪の能勢から迎えたものです。高さは三十センチくらいで、右手に剣を持ち、亀の上に座っています。

この形は能勢の妙見様と同じで、本妙寺の書物によれば、「朝日妙見大菩薩」という名がついています。

本妙寺の周りには昔から信心深い人が多く、今でも妙見講に属する四十人くらいのおばあさんが、毎月十四日に供養を続けています。お寺には、祭りに配ったお札の版木なども残されています。



妙見さん

地名の由来

さめ 島



明治二十二年（一八九）までは鮫島村と呼んでました。古い集落は今の旭化成の西隣付近にありましたが、次第に現在地に移ったといえます。近くの海辺に鮫が多かったので鮫島と呼んだのかもしれない。

治承四年（一一八四）八月、源頼朝が葦山で兵を挙げたとき、鮫島の住人四郎宗家は、頼朝のもとへはせ参じ、石橋山や富士川の合戦に手柄をたてたといわれます。